



竹を乳用牛の飼料として利用する技術を開発

－未利用資源の有効活用による国産飼料の確保－

開発の背景・ニーズ

酪農家の経営コストは、飼料費が47%と大きな割合を占めています。近年の輸入乾草価格の高止まりにより、飼料作物の作付拡大が求められていますが、愛知県は都市化の進展により飼料畑の確保が困難となっています。そこで、竹林から発生する竹を飼料作物の代わりとして利用する技術の開発に取り組みました。

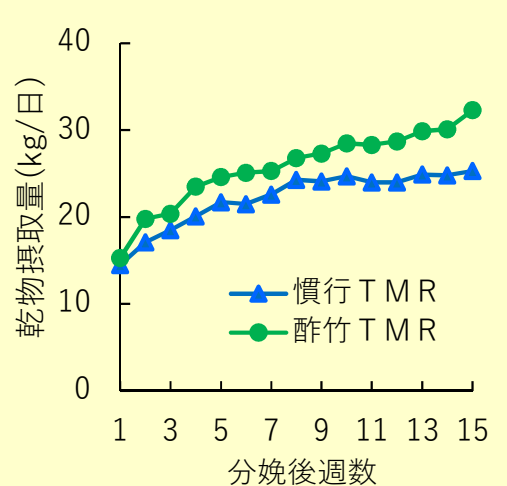
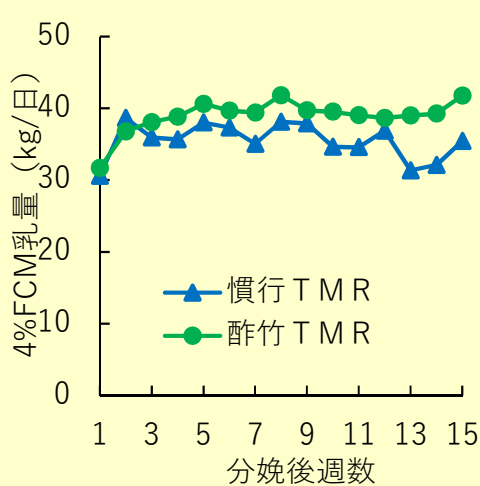
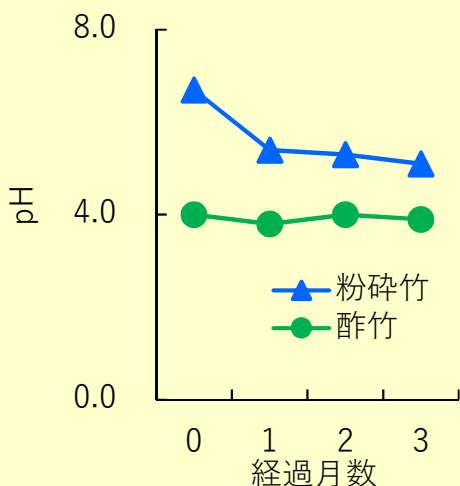
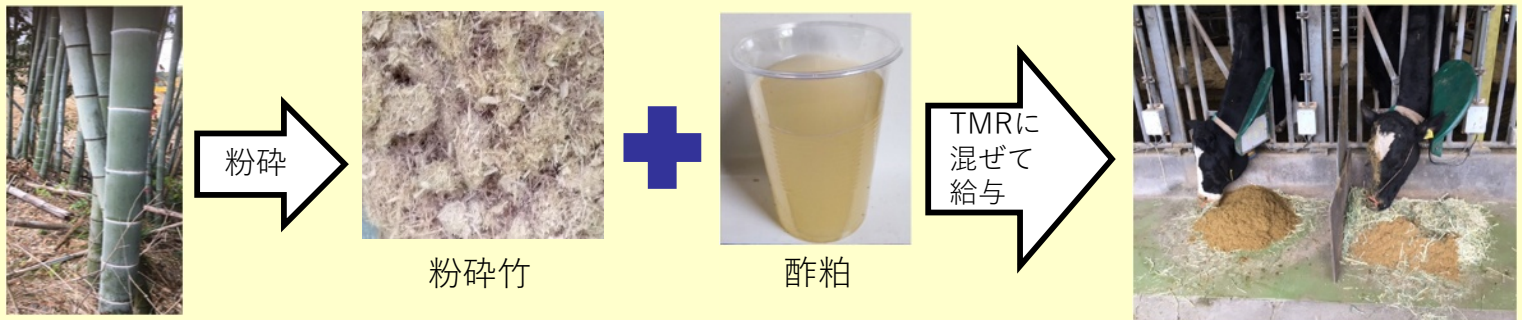
成果の内容

粉碎した竹に、酢の製造副産物である酢粕を重量比20%添加した飼料（酢竹）は、常温で保存可能なpH4前後を維持し、粉碎しただけの竹よりも保存性に優れました。

酢竹を輸入乾草であるスーダングラスの代替として、TMR※1中10%程度配合して、乳用牛に給与する試験を実施したところ、慣行TMRを給与した場合と比べて、乾物摂取量と4%FCM乳量※2が増加しました。

※1：牛が必要とする栄養をバランス良く含んだ飼料のこと。Total Mixed Rationの略。

※2：乳脂肪を4%に補正した乳量のこと。Fat Collected Milkの略。



愛知県農業への貢献

放置されている竹林から発生する竹を有効活用することで、地域の環境保全に貢献するとともに、輸入飼料への依存を減らして国産飼料を安定的に入手できるため、酪農経営の安定に寄与します。